

上演 12 秋田県代表

聖靈学園高等学校

作 中田夢花 村端賢志

潤色 聖靈学園高校

講評文

福島県立安積高等学校

三浦岳人

今回の作品は嘘の在り方はどうあるべきなのか、それを改めて私たちに問いかける作品であると私は受け止めた。自分の本当にやりたいことができず、それを嘘で押し殺しているウミカと、自分を否定され続けて本当にやりたいことがなんなのかわからなくなってしまっているユメの対比が強く出ていたと思う。

私たち高校生は自分のやりたいことを押し殺してしまったり、自分のことがわからなくなってしまうことがたくさんある。そんな私たちにも強く共感できるキャラクターが描かれることで観客たちを引き込んでいた。

私はこの作品に出てきた、「ポジティブな嘘」と「ネガティブな嘘」というものについて考えた。私は「嘘」というものには二面性があると考える。アオヤマくんが修学旅行を休んでサッカーの練習をしていることをメグミはユースに選ばれなかったことを隠すために「ネガティブな嘘」であると捉えていた。しかし後半のウミカはアオヤマくんは次選ばれるための練習をしているんだ、そのためにユースに選ばれたことにして修学旅行を休んだという「ポジティブな嘘」として捉えていた。実際にアオヤマくんがどう考えていたのかは誰にもわからない。しかし、それを周りがどう捉えるかでその嘘が持つ意味というものが変わっていく。だからこそ私たちは物事を色々な角度から見ていくことが重要なだと考えさせられた。

また、周りの環境がその人に与える影響の強さというものを感じた。ユメは親から暴言を受けて育った結果、周りに暴言を吐くようになってしまっていた。ウミカに対しても最後までそれが崩れることはなかった。ウミカも母親と仲良くして生きてきたことでそれが普通であると考えていて、その価値観の違いがユメとウミカとの強烈な差違を生んでいた。それは私たちに改めて普通とは何かを考えさせるきっかけになったと思う。司書の先生に対しての態度からも周りの環境が人に及ぼす影響というものが読み取れたと思う。

ユメは自分を受け入れてくれる司書の先生には強い言葉を使っていなかった。しかし、司書室に泊めることはできないという言葉を聞いたユメが司書の先生に暴言を吐いてしまった。それを見て、心の拠り所であった場所が消えてしまうことの恐さや、そこに依存してしまっている人間の脆さを改めて感じた。また、脚本の書き手であるウミカと写真家のユメという視点でも対比されていると感じた。脚本というものはいくらでも書き換えられるが、写真というものは撮ったら残り続けるものである。それがメグミやユメの言葉で価値観が変わったウミカと最後までスタンスが崩れなかつたユメを表しているように感じた。この作品には「嘘」が作り上げる人間関係、そしてその「嘘」はどうあるべきなのか、それを私たちに考えさせる作品であると私は思う。そしてこれを見た人たちにも考えて欲しいと私は願っている。